

=====

GCOE NewsLetter

[No.40 2011/1/26]

-----

gCOE講演会の開催について  
2010年度第2回gCOE論文賞の募集  
次回のオープンレクチャー  
「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約  
第34回オープンレクチャーの要約  
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約  
2010年度第1回大学院生海外派遣の調査報告

=====

■ gCOE 講演会の開催について

-----

クロード・ペレス教授（プロヴァンス大学）

題目：Imagination et interprétation.

La critique de l'herméneutique de Rimbaud à Beckett

想像と解釈

ランボーからベケットへと至る解釈学の批判

日時：2011年1月27日（木）午後2時30分より

場所：文学研究科大会議室

使用言語：フランス語

■ 2010年度第2回gCOE論文賞の募集

-----

gCOEでは論文を募り、優秀な論文を「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2011年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

応募の受付期間は、2月17日（木）～2月24日（木）です。

詳しい応募方法については下記のgCOEのWebページからご覧ください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/>

---

■ 次回のオープンレクチャー

---

2011年2月23日（水）18:00～

名古屋国際センタービル 15階 グローバル COE オフィスにて

講演者：金山弥平 教授（名古屋大学大学院文学研究科・哲学）

題目：「テキストとしての感情と解釈としてのギリシア哲学」

---

■ 「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

---

松澤和宏（2010年12月25、28日、2011年1月6、7日）

テキスト布置の解釈学の理論的素描を試みながら、人文学における解釈学的探究の意義や射程を考察した。講義の前半では、ヤコブソンの有名なコミュニケーション図式におけるメッセージやコードといった概念の批判的検討を通して、テキスト布置という重層的な構造やコミュニケーションの主体が文化的コンテキストのなかに身を置き、諸々の〈先入見〉にあらかじめ先導されていること、テキストの還元不可能な二重性をガダマー的〈対話〉論の紹介やバルトやデリダのテキスト論の批判的吟味を通して明らかにした。講義の後半では、ハイデッガーやガダマーの哲学的解釈学が新たな地平を切り拓いたにもかかわらず、文学・言語学・歴史学などの人文諸科学が扱う具体的なテキストへのアプローチに関しては哲学的思索の域を出ていない点を指摘した。哲学的解釈学のかかる限界を克服するために、テキスト論の批判的摂取を通して、テキスト布置の解釈学が構想される理路を辿った。また 小林秀雄の文学や歴史についての批評文を例にとりあげて、「無私精神」について解釈学的見地から批判的検討を加えた。

---

■ 第34回オープンレクチャーの要約

---

2011年1月19日（水）18:00～ 名古屋国際センタービル 15階グローバル COE  
オフィスにて

講演者：阿部 泰郎教授（名古屋大学大学院文学研究科・比較人文学）

題目：“霊地”のテキスト学試論

—「生身」の聖徳太子と太子遺跡寺院のテキスト体系—

院政期に出現する聖徳太子の尊像は、聖徳太子絵伝という大画面説話画の世界像を背景に、太子の記憶の遺産(レガシィ)を〈聖なるもの〉として祀る“太子遺蹟寺院”としての法隆寺、鶴林寺、広隆寺、そして天王寺等において造立される。それらは太子像という尊像(ソングウ)を中心に、太子の聖遺物などを配置するパンテオンを形成し、或いは像の内部(胎内)に太子の聖性を象る各種装置を具(そな)え、諸次元の宗教テキストを複合させた太子礼拝空間を構築する。

太子尊像を核とする礼拝空間は、互いに分かちがたい二つの側面で、その宗教的特質を鮮やかに示す。そのひとつは、童子形太子像の帯びる“生身(ショウジン)”性であり、もうひとつは聖霊会(ショウリョウエ)など祭祀儀礼の生成するコンテキストであり、併せて聖性を発生、具現する装置—システムであった。

その典型は、1069年に制作された法隆寺上宮王院の絵殿障子絵伝と童形太子“行像(ギョウゾウ)”および舍利殿(宝蔵)に祀られる太子拳内(ケンナイ)舍利である。更に定海(ジョウカイ)により1120年に制作された広隆寺上宮王院本尊の童形太子着衣像とその祭祀儀礼テキスト『聖徳太子生身供式(ショウジנגシキ)』において、両側面は一具として構想されている。

中世における太子礼拝テキスト空間の最も豊饒な所産は、天王寺をめぐる慈円による営みである。別当としての慈円は、絵堂を再興し絵伝制作と共に九品往生人図と画讃詩歌を勧進し、「真俗二諦(シンゾクニタイ)」を具現する「童質」の太子像を祀り、仏事の講式として『皇太子五段嘆徳(タンドク)』を草した。加えて、和歌においてその世界を更に象ったのが1219年の『難波(ナニワ)百首』である。最晩年1224年の太子への信仰告白というべき『聖徳太子告文(コウモン)』においては、太子と十禅師神(ジュウゼンジンノカミ)が重ね合せられるに至る。更に親鸞は、六角堂での救世(グゼ)観音の夢告により念仏聖の途を歩み、その門徒による「和国(ワコク)教主」太子の祭祀は、童形の「真俗二諦」像ないし「南無仏(ナムブツ)」像と絵伝により爆発的に流布した。太子遺蹟寺院から太子礼拝空間が全国に拡大したのである。

もうひとつの重要な太子礼拝祭儀空間として、太子廟(磯長(シナガ)太子墓)における太子遺骨と太子御記文をめぐる伝承と儀礼(事件)が注目される。既に1054年に太子御記文(起註文(キチュウモン))の発掘が天王寺別当より朝廷に報告され、12世紀までに空海の御廟参龍太子本地感得伝承が「松子(マツコ)伝」と呼ばれる太子遺言記文(廟窟偈)と共に成立していた。1205年には重源配下の念仏聖による太子遺骨盗掘事件が起き、太子廟が室生(ムロウ)と連なる聖地となっていた消息が知られる。法隆寺の顕真(ケンシン)は、これらの記録を集成すると同時に、自らの先祖である康仁の御廟拝見説話を結びつける。そうして1317年成立の中世太子伝(絵伝の絵解き台本『正法輪蔵(ショウホウリンゾウ)』)は、これら太子廟

拝見説話と盗掘事件を重ねて“聖なる盗み”とし、感得した太子の齒より鮮血が流れ出して露見する奇蹟として語るのである。中世には“廟窟太子”とも呼ぶべき時空を超越した太子凶像も創られている。また、廟窟偈(ビョウクツゲ)と起註文は、真宗の太子画像や光明本尊の銘文として、儀礼/凶像テキストの一部と化すのである。

かくして、中世に至り、生身としての太子尊像は、太子伝の説話凶像化である絵伝のコンテキストを背景に、諸次元のテキスト位相を複合させ(そこには、生身仏である善光寺一光三尊如来像とその縁起/絵伝も含まれる)、太子の礼拝と祭儀の空間を、寺院や霊地から至るところに現出(勧請)するようになる。この、太子をめぐる宗教テキストの運動こそは、中世日本の世界像を具現する宗教芸術を理解する核心といえよう。

---

#### ■ グローバル COE 研究教育員ブリーフィング要約

---

第 28 回ブリーフィング (2010 年 12 月 14 日)

金銀珠 「近代日本の文法学における助動詞の成立」

本発表では、助動詞という品詞が近代日本の文法学においていかにして成立したのかを明らかにした。日本語の助動詞は、その規定が言語学のそれと異なり、今日言語学と日本語学の解釈上の混乱を招いている。この混乱の原因には近代日本の文法学者が西洋言語学の「語」という文法単位をどのようにして取り入れるかについて最も苦闘していた語群であったという理由があった。「語」という文法単位は江戸時代以来の日本語の伝統的な分類では存在していなかった。伝統的語分類は、今日の言語学概念で言う「形態素」を分類するに近かった。これは、日本語の動詞の語形変化を例にするなら、動詞に付く接辞が脱着可能なオプション式の語形変化をするからであった。

本発表では、江戸時代の以来の伝統的 분류から近代日本の文法学成立期に至るまで、助動詞という品詞がどのように成立したのかを、その歴史的成立根拠にさかのぼって、解明した。

---

#### ■ 2010 年度第 1 回大学院生海外派遣の調査報告

---

竹田伸一さん(美学・美術史学博士後期課程 3 年)の調査報告を下記に掲載します。

## 「キリスト教における蛇に関する系譜 2」

私の研究テーマはキリスト教における蛇を、その文字テキストと図像テキストの歴史的系譜と変遷から研究するものである。文字テキストの解明には、聖書原典、外典、偽典、後の注解書などの変遷をたどり、図像テキストの解明にはヨーロッパの初期中世からバロックにかけてのキリスト教美術の歴史的変遷を考察する。今回の調査の目的は、ビザンティン美術にも範囲を広げ、マリア崇拜の背景となるデエシス図像（審判者キリストに洗礼者ヨハネと聖母マリアがとりなす図像）とキリストが蛇とライオンを踏みつける図像の原点を探ることと、これまで調査してきた Bible moralisée（道徳的聖書）、Biblia Pauperum（貧者の聖書）、Speculum Humanae Salvationis（人間の救いの鏡）などの書物媒体のオリジナルの写本を確認することであった。デエシス図像に関してはイスタンブールのカリエ美術館、アヤソフィア大聖堂などのコーラ修道院のモザイクを確認し、勝利者キリストの図像に関してはラヴェンナ教会群のモザイク、レリーフ、石棺などを確認することができた。その結果、ラヴェンナのキリストが蛇とライオンを踏みつける図像が、正統派のアリウス派に対する勝利を意味することが更に明確となった。写本、木版に関しては、バイエルン州立図書館で Speculum Humanae Salvationis の木版本を確認し、パリ国立図書館では最も美しい写本の一つ（Fr6275）を確認できた。オックスフォードのボードレイアン図書館では Bible moralisée の世界的な宝と言える写本（Bodley270b）に触れる機会を与えられ、ロンドンの大英図書館ではその続編の（Harley1526,1527）に触れる機会を与えられ、研究者としての感激を味わうことができた。また、アメリカのピアポイント・モーガン図書館とニュー・ヨーク市立図書館では Biblia Pauperum の写本（MS230, Spencer Collection MS31, MS35）を確認できた。また、教会彫刻に関してはアミアンとパリのノートルダム大聖堂で蛇を踏みつけるキリスト像とマリア像の確認ができ、ステンドグラスに関してはケルン大聖堂とサンドニ大聖堂で青銅の蛇の図像を調査できた。こうして、37日間、7カ国、12都市を巡る超ハードスケジュールの調査だったが、無事やり抜くことができ、実り多い結果だったことに深く感謝している。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2011 年 2 月下旬 を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.40

発行：GCOE編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2011 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

• .....

---

..... •